

⑭ イタリア人は「芸者」を何と心得ているのだろうか？ Palazzi, F. の辞書には“*faciulla giapponese istruita nella danza e nella musica, che interviene a rallegrare riunioni e ritrovi* 「ダンスや歌のたしなみがあって、会合やクラブが陽気になるようにとりはからう日本娘」”とあった。娼妓ではいけないらしい。いずれにせよ、いかがわしい意味は含まれていなかったの、ホッとした。

⑮ *carachiri* 「カラキリ」とも云う。Migliorini, B. はこの形がまちがっていることを指摘しているが、D'Annunzio は「カラキリ」を使っているらしい。これでは本当の「腹」は切れずに、「カラ（空）」を切ることになる。

英語におけるギリシア語からの借用語について

神 笠 公 伯

借用は音韻変化や類堆と共に言語変化に強力に作用する重要な一要因と考えられているが、一体英語においては外来語からの借用はどういう状態にあり、いかなる語がどのような過程を経て借用され、それが英語の体系にいかなる影響を与えたのか、特にギリシア語からの借用という観点のみに限定して歴史的に眺めてみようと思う。

英語は印欧語族のゲルマン語派に属する言語であるから、その本来の語彙は当然ドイツ語と同系のものである。ところが英語においては、本来語だけの増加以外に外来語の借用による語彙の増大が極めて著しく、その点で日本語と同じように混合語の代表的存在とみなされているのである。それは殊に、ラテン語やフランス語などのロマンス語系統のものが多く、大ざっぱに言って、総語彙の約 35% がゲルマン語、約 55% がロマンス語で、その残りの約 10% がギリシア語及びその他の言語の語彙が入ったと言われている。だから、現代英語はゲルマン語派としての文法的形態を保ちながら、語彙的にはフランス語・ラテン語・ギリシア語系統のものが非常に多くて、多少とも高尚な事柄について語ろうとすれば、これらの語彙が絶対に必要なのである。しかし、各語の使用頻度という点から考えると、ゲルマン語系の方が圧倒的に多く、ロマンス語系の語の使用度は極めて少ないようである。なお、語彙を構成する種類から言えば、語彙の中核を成す普通語 (common words) 日常の口語 (colloquial words) ・俗語 (slang) などには本来語が多く、外来語の方はこれを取り巻く周辺的存在で、文章語 (literary) ・科

学語 (scientific words)・専門語 (technical words)などに数多く見られる。

英語が諸言語からたくさん借用語を採り入れた結果、語彙が非常に豊富になってきて、今や世界最大となっているが、これについて Jespersen は、*Growth and Structure of the English Language* §18において、「これはとりもなおさず、外来の文化財に対する英語の寛容を示すものであって、“masculinity”(男性的性格)と呼ばれる所以である。」といったような意味のことを述べている。

そこで英語におけるギリシア借用語 (Greek loan-words) であるが、これは数から言うとなラテン語やフランス語には到底及ばないけれども、その語形や語義の点では、特徴があるので注意すべきである。これを時代的に区分して述べると、ギリシア語借用の最盛期は 16 C 即ち M E. 期以後で、その最初の借用は O E. 以前、即ち、Anglo-Saxon 民族の Britain 渡来以前に遡るようである。

(1) 大陸時代

この時代にギリシア語から直接ゲルマン語に入ってきた語は少数しか存在しないようである。それらは全て宗教に関する語で、最初ゴート人が借用しゲルマン諸方言に広まったのであろう。その中資料によって立証され、また今日まで引続き使用されている語は次の 4 語に尽きるのではあるまいか。

Angel (<Gk. aggelos=messenger), devil (<Gk. diabolos=Satan),
church (<Gk. kuriakon[dōma]=Lord's [house]), priest (<Gk. pres-
buteros=elder, older)

当時大陸に在住したゲルマン民族はローマ帝国の外に住んでいたが、兵士としてローマの軍隊に備われてラテン文明を知っていたため、ローマ人と接触して多くの Vulgar Latin を採り入れたが、その中にはギリシア語からラテン語に入って、更にそれが再借用されたものがある。ラテン語の口語を媒介として借用されたもののうち、現在まで残存する語の例を挙げると次の通りである。

Synod (<L. synodos<Gk. sunodos=a meeting[syn-+hodos=way]),
toll, copper (<L. cuprum <Gk. Cyprium=Cyprian metal:古代の銅産地
Cyprus にちなむ), purple (<L. pupura<Gk. porphora=purple fish),
sock (<L. soccus<Gk. sukkhos=comic actor's shoe), sack, butter
(<L. bŭtyrum<Gk. boutŭron[boŭs=ox+tŭron=cheese]), disk (<L. di-
scus<Gk. discos=quoit), pepper (<L. piper<Gk. peperī), elephant,

oyster (<L. ostrea<Gk. ostreon) など。

(2) O E. 時代 AD. 700~1100

O E. における借用語のうち、かなりの数のものがラテン語経由でギリシア語に遡るようである。これはローマ文化がギリシアに負うところ大であったことを物語っている。そこで、ギリシア語が間接には相当数英語に入ったようである。初期にはまだ口語を媒介として借用されていたが、イギリスのキリスト教化や文化の発達につれて、次第に文語を通して採り入れられた語が増えはじめた。この傾向は M E. 時代以後ますます著しくなっていく。従って、O E. の語彙は Mod E. のそれに比較すればまだ純粹であったと言える。すなわちドイツ語が今でもそうであるように、外来語が少なく、新語は本来語の合成や接頭辞接尾辞による派生によって造られることが多かったのである。

Anchor (<L. ancora<Gk. agkūra), monk (<L. monachus<Gk. monkhos=living alone, solitary), minster (<L. monastērion<Gk. monasterion; monastery と姉妹語), gloss, crystal, stole, metre (<L. metrum=poetic metre, verse<Gk. metron=measure), psalm (<L. psalmus<Gk. psalmos=song sung to harp), hymn, theatre (<L. theatrum<Gk. theatron=seeing place cf. theomai=behold), balsam, lily, peony, rose (<L. rosa<Gk. rhodon), phoenix, abbot, alms, clerk, demon (<L. daemon<L. daemon<Gk. daimōn), idol, paradise (<L. paradīsus<Gk. paradeisos=park), paper (<L. papȳrus<Gk. papūros=paper reed), philosopher (<L. philosophus<Gk. philosophos), school (<L. schola<Gk. skholē=leisure, philosophy, lecture place), comet など。

上掲の語をその原語であるラテン語・ギリシア語と対照すれば明らかであるように、英語に入った形はギリシア語の原形そのままではなく、多くラテン語式に規則的な書き直しがされている。即ち、ギリシア語の k, ai, ei, oi, ou, u などは、ラテン語ではそれぞれ c, ae (æ), i, oe (œ), u, y に変えられている。この習慣は英語のみならずヨーロッパ諸国語一般の伝統となっており、近代期以後に至るまでも、ギリシア語の借用、殊に学術語として新しい語を形成する際には、常にラテン語風の語形を採用することになった。なお、ラテン語には、ギリシア文字 θ, ρ, φ, φ, χ に当る文字がないので、それを th, rh, ph, ps, ch で写している。だからこのような文字のあるラテン語、ひいては英語は大体ギリシア語起源であったと言ってもさしつかえあるまいと思う。

(3) ME. 時代 AD. 1100~1500

この時期からギリシア研究が盛んになったため、以前にもまして多くの借用語が見られる。その中にはラテン語経由の借用語も少なくなかったが、OE. 時代と異って、Norman Conquest (1066) の影響により、大部分は E < F < L < Gk. という経路でラテン語から更にフランス語を通して英語に採り入れられた。これらの借用の経路から、中世末期にイギリスに輸入された文化の究極の源流がギリシアであったことが窺える。

(a) フランス語経由の語

Academy (<F. académie < L. acadēmīa < Gk. akadēmeia), atom (<F. atome < L. atomus < Gk. atomos = indivisible; a = not + tomos (adj.) cf. te-mein = divide, cut), bible (<F. < L. biblia < Gk. biblia = books, これは biblos の指小辞 biblion = little book の複数形で papyrus bark の意味), centre (<F. centre < L. centrum < Gk. kentron), character, climate, diet (<F. diete < L. diæte < Gk. diaita = way of life), diphthong, dropsy, ecstasy, emblem, fancy, frenzy, galaxy, harmony, horizon, idiot, ink (<F. enque < L. encaustum < Gk. egkauston = 皇帝により用いられた署名用の purpul ink), logic (<L. logica < Gk. logikē), magic, magnet, melon, Muse (<L. Mūsa < Gk. Mousa), mystery, nymph, pause, pheasant (<L. phāsiānus < Gk. Phāsiānos < Phāsie; ソ連邦 Georgia の川の名、今は、Rion 川、そこがこの鳥の原産地といわれる), pomp, quince, rhetoric, rheumatic, scandal, spasm, sphere (<L. sphaera < Gk. sphaīra), stratagem, surgeon, thyme, tragedy (<F. tragédie < L. tragoedia < Gk. tragōidia : tragos = goat + ōidē = song 山羊の合唱), type, tyrant, など。

(b) ラテン語のみ経由のもの

Abyss (<L. abyssus < Gk. abussos; a = without + bussos = bottom), agony (<L. Gk. agōnia), artery, asphalt, chaos (<L. < Gk. khaos), cycle (<L. cyclus < Gk. kuklos = circle), dactyle, echo (<L. < Gk. ēk-hō), ethic, hero (<L. < Gk. hērōs), history, mania, pirate, plague, Sphinx (<L. < Gk. sphigx), thesis, など。

(4) ModE. 時代 AD. 1500~

近代英語に入ると、15~16 C. の Renaissance に影響された結果、古典研究が盛ん

になり、ラテン語と共にギリシア語も多く流入し、思想上にも言語上にも新鮮な刺激と領域をもたらした。従ってM.E.時代と違って、イギリスでギリシア語がかなり知られるようになったため、フランス語を経ることは稀で、多くはラテン語を経るか、あるいは直接ギリシア語から必要な語を借用するという気風が起り始めた。そしてその綴り字も大抵現在行なわれているものに近いものになって英語が出来た。次に16C.以後現代に至るまでの実例を世紀別に掲げる。語の順序は大抵に於て借用の年代順である。

(a) 16C.

Irony (<L. īrōnīa<Gk. eirōneia), alphabet (<L. alphabētum<Gk. alphabetos; alpha+bēta). trophy (<F. trophée<L. trop(h)aeum<Gk. tropaion), elegy (<F. é légie<L. elegīa<Gk. elegeia), drama (<L. <Gk. drāma cf. drao=I do), dilemma, phrase, idea, enigma (<L. x nigma<Gk. ainigma), scene (<L. scēne<Gk. skōnē=stage, tent), rhapsody, crisis (<L. <Gk. krisis=dicision), tragic, cynic (<L. cynicus <Gk. kunikos=doglike), labyrinth, machine, scheme (<L. schēma<skhēma:schemaと姉妹語), anemone (<L. Gk. anemōnē 原義daughter of the wind), cube, hyacinth, isthmus, rhythm, chorus (<L. Gk. khoros), chemist, despot, tonic (<Gk. tonikos), nausea (<Gk. nausia), basis, meander (<L. maeander<Gk. Maiandros, 小アジアの古代Phrygiaを流れる曲折の多いMenderes川), sceptic, skelton, pathos (Gk. pathos= a suttering disease, emotion), climax (<L. <Gk. klīmax), comma, colon, critic, ode (L. ōda<Gk. ōidē, aoidē), epic, trochee, disaster, chasm, patriot, theory, energy など。

(b) 17C.

Idyll (<L. īdyllīum<Gk. eidyllion), enthusiasm (<L. enthūsiasmus<Gk. enthūsiastos), orchestra (<L. <Gk. orkhēstra cf. orkheomai=I dance), strophe, barytone (<Gk. barutonos, barrus=heavy+tonos=tone), absinthe, museum (<L. <Gk. mouseion=place for the Muses or for study), system (<Gk. systema(syn-+Gk. histanai=to place)), hyphen, clinic, tactics, lymph, dogma, typhus, electric (<L. ēlectrum<Gk. ēlektron=amber:摩擦により電気を起すことが初めて認

められた), aeon, cosmos (Gk. Kosmos), elastic, siphon, celery, nous, botany, など。

(c) 18C.

Camera (<L. camera=arch, vault<Gk. kamara, chamberと姉妹語), phlox, bathos, trptych (<Gk. tri=thrice+phyxの属格pthykhos=to-ld, leaf), philander (<Gk. philandros), anther, thrips, など。

(d) 19C.

Rhea, phase, pylon, acrobat (<F. acrobate<Gk. akrobatos=walking on tiptoe cf. akros=point+batos<baino=go), corm, myth (<Gk. mythos=word, speech, fable), rhizome, agnostic (<Gk. agnōstos; a=not+gnostic=clever, knowing), therm (<Gk. thermē=heat<thermos=hot), など。

以上の諸例からわかるように、近代期初期のギリシア借用語は概ね文学作品や学術的著作から採り入れたlearned wordが多い。これに反して日常語は、alphabet, idea, scene, machine, ink, energyなど少ないが、日常の語彙の必須部分となっているものもある。

現代に近づくにつれて直接借用の語が増加し、殊に18C. 以後は殆んど全部原語からそのまま入ってきているようである。また時代が下るに従って語数が漸減しているのは借用に関してのみで、英語に与えたギリシア語の全貌を示すものではなく、過去200年間の自然科学の驚異的な進歩に伴い、益々多くの新語の必要性が増したので、無尽蔵な造語力をもつと考えられているギリシア語に頼って、数多くの複合語 (compound word) や派生語 (derivative) が造られたのである。勿論大部分は純然たる学術語であるが日常語として用いられているものもある。

このようなギリシア語と学術語との親近関係はヨーロッパ諸語全体に共通の現象で、この種の専門語は国際性をもっている。またギリシア語から来た英語のprefix, suffixは甚だ多く、それが完全に英語の中にとけ込んで重要な役割を果しているが、それは本来ギリシア語が複合や派生に対して極めて自由便利で有効な語構成能力をもっていて、精密な語義の相違を示すのに適しているためである。

ギリシア語が新しい学術用語の構成に好んで使用せられるのは、上に述べた理由のほか、ギリシア語が一般民衆にはit is Greek to meであるために、既に輸入されたラテン語や

フランス語、及び英語固有語などと違って、色々な他の雑念なしに、純粹にその輸入された意味だけで民衆に受け入れられたのでそこに曖昧さがいないためでもあろう。このように學術語にはギリシア語起源のものが多数あって、英語の語彙を豊富にしているので、その源であるギリシア語の意味を心得ておくことは頗る大切であると思う。たとえば、

anthropology (<Gk. anthrōpos=man+-log- cf. legein=to speak+
-ia), biology (<Gk. bios=life), cacography (<Gk. kakos=bad, evil),
euphemism (<Gk. eu=well), biography (<Gk. graphein=to write, draw),
hemisphere (<Gk. hēmi-=half), lithography (<Gk. lithos=stone),
metaphor, metaphysics (<Gk. meta-=among, after, over), neologism
(<Gk. neos=new), neurosis (<Gk. neuron=nerve), panacea (<
Gk. pan=all), periphrasis (<Gk. peri-=around), physiology (<Gk.
physis=nature), synchronize, synonym (<Gk. syn-=with) etc. は一般的
な例である。

フランス語に於ける借用語について

村 上 勝 也

§ 1 Avant-propos

ブルーム・フィールドは、借用を、文化的借用、親密的借用、方言的借用の三種類に分類している。私は、この中の、文化的借用の立場から、ある国民が、他のある国民に何を教えたかということを知る目的で、フランス語におけるアラビア語、ゲルマン諸語、その他の言語からの借用語を調べてみた。原稿枚数の関係から、ラテン系の言語、その他は省いたが、それらは次回に書きたいと思う。なお今後は、ある特定の言語に的を絞って、「借用語はどのようにして借り手の言語の語彙に同化してゆくか？」という問題にまで掘り下げてみるとおもしろいと思っている。

参考：Précis d'histoire de la langue et du vocabulaire français, par A. Dauzat, Historical French grammar, by Darmesteter, Etymologisches Wörterbuch der französischen Sprache von Gamillscheg.

§ 2. Arabe